

発達障害を扱う日本のテレビ番組の言説特性及び視聴者による語りの特徴

—医療化とのかかわりに注目して—

西田有香子（名古屋大学大学院 国際言語文化研究科）

1. 背景

2000年代に入り、日本において発達障害の制度化が進められる中、発達障害という言葉を耳にする機会は多くなり、マスメディアにおける取り上げ数も大幅に増えた。その状況は2016年現在も続いている。今もなお高い社会的関心がもたれていると言えよう。今日の日本では、注意欠如多動性障害(ADHD)、学習障害(LD)、そしてアスペルガー症候群や自閉症スペクトラム障害(ASD)といった自閉症関連障害を合わせて発達障害と呼称することが一般的になりつつあるが、報告者が分析対象としたのもこれらに関する番組である。

発達障害を扱う医学的研究は多数あるが、同時に社会学的な研究も行われてきた。中でも幾つかの研究は医療化の一事例として発達障害を取り上げている(P. Conrad 1975; 木村祐子 2015など)。医療化とは、P. Conrad (2005=2006: 3)によると「ある問題を医学用語で、通常は病気あるいは障害として定義し、それを治療するために医療的介入を用いること」を意味する。医療化概念の捉え方は研究により違いが見られるが、多くの社会学研究は、以前には病気あるいは障害とみなされることが少なかった出来事が経年の中で個人内病理として理解され対処されるようになるという現象を記述するためにこの概念を用いてきた。

医療化とマスメディアの関係性をめぐっては、テレビや新聞が医療化を推し進めることがあるという指摘が先行研究の中でなされたことがある。同時に、マスメディアは医療化に抵抗する役割を担うと論じる研究も見られる(S. J. Williams と M. Calnan 1996など)。またADHDに関しては欧米にてマスメディア表象の研究(M. F. Schmitzら 2003; J. N. Clarke 2011; M. Horton-Salway 2011)が存在するが、これらの研究からは、イギリスや北アメリカの雑誌・新聞の中に医療化推進に結びつきうると考えられる言説、およびその抵抗に結びつきうると考えられる言説がいずれも見られることが読み取れる。

しかし、医療化とメディア言説との関連を論じる先行研究は限られており、特に医療化推進に結びつきうる言説とその抵抗に結びつきうる言説の両面に目配りをして捉えようとする研究は少ない。発達障害に関しては欧米におけるADHD表象の研究、しかも新聞や雑誌を対象とするものに偏っている。

2. 研究目的

医療化とのかかわりに注目して、発達障害を扱う日本のテレビ番組および視聴者等によるコメントの言説特性を明らかにすることを目指した。

具体的には以下の 4 点を明らかにした。

- (1) 番組にはどのような言説変化が見られるのか
- (2) 番組はどのように「発達障害アイデンティティ」の構築にかかわっているか
- (3) 医療化推進に結びつきうる言説とその抵抗に結びつきうる言説がいかに見られ、両者が関連するのか
- (4) 視聴者等のコメントの中に医療化推進に結びつきうる言説とその抵抗に結びつきうる言説はいかにみられるか

3. 分析対象

(1) に関して

2000 年から 2014 年に放送された NHK テレビ番組『きょうの健康』9 本

(2) に関して

2012 年から 2014 年に日本の地上波で放送された番組 54 本

(3) に関して

2012 年から 2014 年に日本の地上波で放送された番組 54 本

(4) に関して

『クローズアップ現代』「“薬漬け”になりたくない～向精神薬をのむ子ども～」(2012 年 6 月 13 日放送) に関する Web 上の掲示板のコメント（コメント数 63 件）

4. 分析結果

(1) に関して

2000 年放送の 1 番組と 2010 年以降に放送された 8 番組の間には、以下のような言説変化が見られた。①発達障害を個性とは異なるものとして位置づける言説から、障害と個性が明確に区分けできるようなものでないとする言説へ変化。②落ちつきのなさなどの行動特性自体を問題視する言説から、行動特性が顕著な場合に社会生活上の困難を伴いやすく、本人が「困り感」を味わいやすいことに着目した言説へ変化。さらに、2014 年放送の番組では発達障害は「脳の働き方の違い」と語られており、脳機能に言及する際に 2013 年までの 8 番組に共通して見られた「異常」、「不十分」などの否定的価値判断を伴う言説から変化していることも見出した。

この知見を日本マス・コミュニケーション学会の 2015 年度春季研究発表会にて発表し、その研究発表論文が公表された。

(2) に関して

キャプションの使用などにより視覚的にも特定の人々と発達障害カテゴリーが結びつけられていること、生活スタイルや個人の趣味とも捉えることが可能な出来事（例えば部屋中の物が同色である、物をいつも同じ場所に置くことに決めているなど）が発達

障害特性の一つとして語られていることなどを明らかにした。医療や福祉と結びつく形でアイデンティティ構築がなされることに伴い、異常性や困難性に焦点が当てられるがちになること、個人内病理として表象されることへの挑戦は見られるものの、ごく限られることなどを見出している。考察を踏まえ、より多様な表象の必要性と可能性について示唆している。

この結果を2016年7月12日にInternational Sociological Third ISA Forum of Sociologyにて口頭発表を行った。(タイトルは、Medicine, Media and Identity: The Discourse on "Developmental Disabilities" in Japanese TV Programs 場所はウィーン大学)

(3)に関して

医療化推進に結びつきうる言説として「発達障害は脳機能障害であるとする言説」や「早期発見・早期診断が大切であるとする言説」などを見出した。一方、医療化への抵抗に結びつきうる言説には「発達障害は脳の働き方の違いとする言説」などがあった。

発達障害とはいかなるものかを定義する部分で「発達障害は脳機能の不具合であるとする言説」が見られるケースが54番中16番組に見られた。これらの番組では番組1本全体を通して医療化推進の方向へとフレーミングがなされていると考えられる。しかし、医療化に抵抗する方向へフレーミングされている番組(1番組のみ)やいずれの方向にも明確なフレーミングがなされていない番組(2014年放送の番組に多い)も分析番組には見られた。

(4)に関して

コメントの中には、子どもの不適応行動を病気／障害と捉えていることが読み取れるもの、医療と教育との連携の必要性が主張されているもの、薬物治療は効果的であるとして賛成するものなどがあった。これらのコメントでは、医療化推進に結びつきうる言説が語られていると言えよう。一方、医療化への抵抗に結びつきうる言説が語られるコメントもあり、子どもの不適応行動を病気と捉えることに批判的であったり、副作用や脳への長期的影响を懸念して薬物療法に反対の意が述べられていたりした。

5. 総括

マスメディアが発達障害という形で医療化された言説を伝えることにより、落ち着きのなさやコミュニケーション下手などから生じる不適応は個人内病理であるという認識へと視聴者らを導き、社会の構造的問題には十分に目が向けられなくなることに問題意識をもち、本研究に取り組んできた。2012年から2014年放送の54番組においても、様々な行動特性が発達障害概念と結びつけられ、脳機能の障害であると語られているのが見て取れた。番組全体として医療化推進の方向へフレーミングされていることが読み取れるケースもあった(16番組/54番組)。

一方、番組分析を通して落ち着きのなさなどの行動特性が顕著で生きづらい状況にある人々をいかに表象するかをめぐり、番組が試行錯誤していることも明らかとなってきた。たとえば個性と病／障害との関係をいかに捉えるか、発達障害そのものは治すべきものなのかななどについて言説が揺らぐことや、経年の中で変化していくことがあり、これらの人々に対する理解の仕方、関わりのあり方が模索されているのが読み取れた。

今後の課題として、視聴者等によるコメントの分析、および番組の言説変化の分析範囲を広げたいと考えている。そして研究を通して、マスメディアにおける発達障害言説は他者の異質性を理解し、共生を目指す上でいかなる限界を伴っているか、また可能性が垣間見えるのかという問い合わせに迫りたい。

6. 参考文献

- Clarke, J. N., 2011, "Magazine Portrayal of Attention Deficit/Hyperactivity Disorder (ADD/ADHD): A Post-Modern Epidemic in a Post-Trust Society," *Health Risk & Society*, 13(7-8): 621-36.
- Conrad, P., 1975, "Discovery of Hyperkinesis: Notes on the Medicalization of Deviant Behavior," *Social Problems*, 23(1): 12-21.
- , 2005, "The Shifting Engines of Medicalization," *Journal of Health and Social Behavior*, 46(1): 3-14. (=2006, 進藤雄三・松本訓枝訳 「医療化の推進力の変容」森田洋司・進藤雄三編『シリーズ社会問題研究の最前線 I 医療化のポリティクス——近代医療の地平を問う』学文社, 3-27.)
- Entman, R. M., 1991, "Framing U.S. Coverage of International News: Contrasts in Narratives of the KAL and Iran Air Incidents," *Journal of Communication*, 41(4): 6-27.
- , 1993, "Framing: Toward Clarification of a Fractured Paradigm," *Journal of Communication*, 43(4): 51-8.
- 樋口耕一, 2014, 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版.
- Horton-Salway, M., 2011, "Repertoires of ADHD in UK Newspaper Media," *Health: An Interdisciplinary Journal for the Social Study of Health, Illness and Medicine*, 15(5): 533-49.
- 木村祐子, 2015, 『発達障害支援の社会学—医療化と実践家の解釈』東信堂.
- 佐々木洋子, 2006, 「AD/HD と医療化」森田洋司・進藤雄三編『シリーズ社会問題研究の最前線 I 医療化のポリティクス——近代医療の地平を問う』学文社, 181-93.
- Schmitz, M. F., P. Filippone and E. M. Edelman, 2003, "Social Representations of Attention Deficit/Hyperactivity Disorder, 1988-1997," *Culture & Psychology*, 9(4): 383-406.

Williams, S. J. and M. Calnan, 1996, "The 'Limits' of Medicalization? : Modern Medicine and the Lay Populace in 'Late' Modernity," *Social Science & Medicine*, 42(12): 1609-20.